

霞ヶ浦の流入河川(恋瀬川)でワカサギの産卵場を発見

今年(2007年)の霞ヶ浦におけるワカサギ漁は、久しぶりの好漁となっています。これから、ワカサギは成熟し始め(11月下旬頃)、2月頃に産卵します。今回は、最近の調査により、霞ヶ浦の流入河川内でワカサギの産卵場を発見したことについて紹介します。

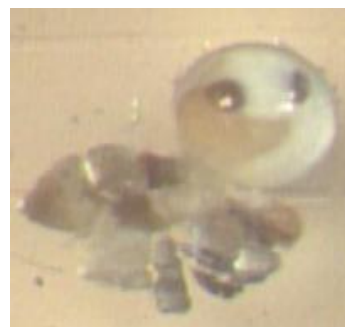
霞ヶ浦では、湖内各地の水深1m前後の砂地で産卵場が見つかっていましたが、流入河川ではまだ発見されていませんでした。しかし、一般的に湖沼に生息するワカサギは、流入河川が無い場合を除いて、湖岸域だけでなく流入河川内でも産卵します。長野県の諏訪湖や島根県の宍道湖、秋田県の八郎湖などでは、主要な流入河川の下流や河口で、大きな産卵場が確認されています。

そこで、2005、2006年の2月に、高浜入りの奥に流入する恋瀬川で産卵場調査を実施しました。9か所の調査点で、採泥器により15cm四方(225cm²)の底質(砂や泥)を合計39回採取し、その中のワカサギの卵数を計数しました。

調査の結果、河口から常磐線鉄橋上流側までの範囲(St.1~5)では、底質が産卵場に不適な泥で、卵は全く見つかりませんでした(下図)。その上流側(St.6, 7)の底質は、産卵場に適した砂~粗砂で、計12回採泥したうち1回で3粒のワカサギ卵が採取されました。そして、支流の「天の川」では恋瀬川との合流地点から上流約0.7kmの範囲(St.8)でワカサギ卵が採取されました。11回採泥したうち10回で平均114粒の卵が採取され、恋瀬川本流より広範囲で濃密な産卵場であることが確認されました。

底質がほぼ同じ砂地でありながら、恋瀬川本流と支流「天の川」で産卵状況に違いが表れた要因については、川の流速に注目しています。川幅が50~100mある恋瀬川は、極めて緩やかな流れでしたが、川幅が5~10mほどと狭い「天の川」では速い流れとなっていました。ワカサギ親魚は適度な流れがある場所や川に集まる、あるいは遡上する習性があります。「天の川」では、好適な「流れ」に多く親魚が誘引され、濃密な産卵が行われた可能性があります。

恋瀬川では、産卵期にワカサギ親魚が遡上することが以前から知られていましたが、今回、ようやく産卵場を確認でき、霞ヶ浦のワカサギの一部は、流入河川で産卵することが明らかになりました。霞ヶ浦北浦のワカサギ資源が将来にわたって存続するためには、多様な産卵場の存続が不可欠です。今後は、他の河川においても調査を進め、流入河川の産卵場が霞ヶ浦のワカサギ資源へ果たす役割などを明らかにしていきたいと思います。



ワカサギ卵 (砂粒を付着させている, 卵径は約1mm)

産卵場調査結果

参考文献の一部

河崎 正・位田俊臣. 1996. 茨城県内水試研報, No. 32. 1-7.

白石芳一. 1952. 淡水研報No. 1. 26-40.

(富永: 湖沼部)